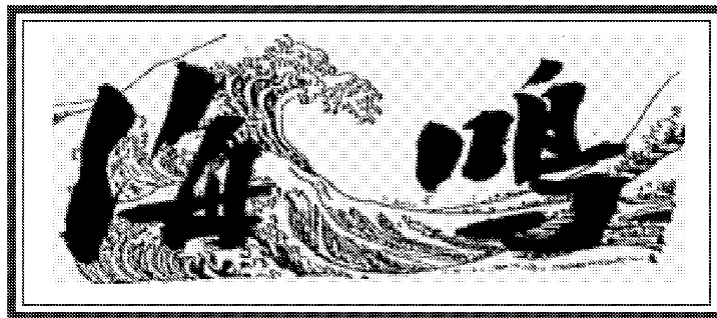




学長選考を考える (第 4 報)

新大職組主催

「学長選考を考える」集会
が開催されました

2025 年 12 月 17 日 (水)、
総合教育研究棟 E260 教室を
会場として、新潟大学職員組合
主催「学長選考を考える」集会が
開催されました。

集会では、9 月以降における
教員有志の取り組みに関する報
告に続いて、教授会決議・要望書
の採択に向けた取り組みと成果
について、人文学部、教育学部、
理学部、工学部、農学部の教員か
ら報告があり、続いて、学長選
考・監察会議の説明についての
批判的検討、全国的な動向から
見た今回の学長選考の特徴等につ
いての報告がありました。意見
交換では学生の発言もありま
した。

全体を通して、学長選考・監察
会議における選考の問題点、同
三輪議長による説明の本質が明
らかなりました。学内教職員
による自治意識の状況も報告・
共有されました。学生の出席者
から、学生の意志が学長選挙に
位置付けられていないことを批
判する発言があったことは重要

な成果だったと思われます。

ここでは、本集会に出席され
た方々から頂きました感想を紹
介させていただきます。

学長選考・監察会議は十分な
説明を行い、疑義の終息を！

北村 繁

(社会科教育・自然地理学)

今回の集会に参加して感じた
のは、少なからぬ人たちが未だ
十分な説明を求めていることで
ある。と同時に、学長選考・監察
会議が、「議事概要」「議長声明」
を通じて詳細な説明を行わない
ことにより、会議への疑念が膨
らみ始めているのではないかと
不安に思う。

各学部・学系では、人事の際に
は、業績審査報告書が作成され
る。選考過程で、その採用が適
切・公正であったことを示すた
めには当然のことだろう。今回
の学長選考では、選考の過程で、
従来なかったこと（そして他の
国立大学法人でも稀なこと）が
生じているだけに、少なくとも
業績審査報告書程度には説明す
るのが当然ではないか。選ばれ
た候補者は、大学運営や経営に

携わった経験や実績について具
体的にどのように評価されたの
だろう。また、事業の継続性や
各種取組を推進する実行力・コ
ミュニケーション力、学内外へ
の貢献度・信頼度は、どのように
評価されたのであろうか。そし
てそれらは、どのような根拠で
意向投票の結果より重視すべき
とされたのだろうか。候補者全
員が学内者である学長選考では、
可能な限り、それらは、他の候
補者についても報告されるべきだ
ろう。

また、過去の学長選考・監察会
議で書面会議などによる投票が
行われた場合、議事概要に投票
数と賛否の実数が示されている。
しかし、今回は、投票の実数が示
されないことで、いらぬ疑念を
生んでしまっていると言わざる
を得ない。

教育学部教授会では、小野寺
氏が出席しなかった理由につい
て質問が出た際、小野寺氏自身
の意思で出席を辞したのではな
いかという推測に基づく誤った
回答を、学部長が行うという事
態を生じている。これは、学長選
考・監察会議はわかりきったよ
うな内容に至るまで詳細な回答

をしないと、会議の外で思わぬ
疑念が広がることを示唆してい
る。

疑念が広がることで学内のコ
ミュニケーションに溝が生まれ
て迷惑するのは、誰であろう。選
ばれた染矢氏である。学長選考・監
査会議は、詳細な説明を行い、事
細かな質問に、本気に対応し、膨
らみつつある疑念を終息に導い
てほしい。



教員 (工学部)

「学長選考・監察会議」によって
次期学長が決定されること自体
に問題がある、という指摘はそ
の通りだと感じました。さらに、
その制度を前提とするのであれ

ば、第1号委員である外部委員5名がどのような基準・経緯で選出されているのか、また、どのような考えや問題意識を持って会議に臨んでいるのか、より明確にされるべきだと感じました。外部委員が、牛木学長の意向に沿って投票したのではないかという懸念が生じ得ること、そして外部委員を選ぶ立場にある者が、結果として次の学長を事実上選出できてしまう仕組みになっている点は、制度上の大きな問題だと思っています。

また、学内全体としてこの状況に慣れてしまい、長年に渡って医学部から学長が選出され続けていることに対して疑問や懸念を抱かなくなっているのではないか、という点も気になりました。



加えて、今回の会については、より十分な議論の時間が設けられていれば、なお良かったと感じました。特に学生も巻き込んだ形で議論を行うことにより、現在の学長選考制度が抱える問題点を、学内に止まらず、社会に対しても発信していくことが可能になるのではないかと思います。

名誉教授（理学部）

タイムリーな重要な企画と思います。今、大学が本来持つべき見識、知性を疑うような事態が続き、大変遺憾に思っています。

この学長選もそうですが、軍事研究もそうですし（最近では、信州大の軍事研究応募容認等）、学術会議法人化の時にも、大学自体からは教授会レベルで意見が上がらずに法改正に至ってしまいました。安全保障技術研究推進制度への応募件数は3倍、採択件数は約2倍に上昇しました。

広く、大学人の中で、大学の自治が崩れることの重大性への認識が弱いのではと危惧しています。このような動き、意識状況は、今の戦争準備にひた走る動向と連動していると思います。正直、危機感を持っています。

今回の企画を機会に、もっと学内に宣伝して、大学の自治、大

学人の見識、科学者倫理といった点を広めてほしい。

今回、いくつかの学部で粘り強く議論され、決議が採択されたことは非常に重要と思います（今日、講義をして、学生も名前を出すのは遠慮という雰囲気でした）。やはり、大量の宣伝と、勇気を持つての発信がカギでしょうね。（学生にも、類似のことを、今日、話しました。集会決議、全く妥当です。どうか、頑張ってください。

卒業生（農学部）

酒匂さんのお話のなかであった「意見を持つことがコストとして認識されるようになりつつある」というのが、とても怖いことだと思いました。意見を持たなく（持てなく）なったら、それはもう、もはや人間ではないと思います。それが、学問の自由が保障されて然るべき大学の内部でさえ、保障されていないということは、学問の自由の議論以前に非常に問題だと思います。

大学であれ、世の中全体であれ、人々が自由に心の中に意見を持つて、そして、その意見を自由に表明できるようにすることを、切に願います。（本来、社会全体、すべての市民に保障されるべきものですが）まずは、学問の自由が保障されているは

ずの大学という場から、意見を持つて、意見を表明する自由が、認められていてほしいと願っています。

労働組合役員（新潟県）

非常に充実した分析によって、大学や学術をめぐる深刻な状況について初めて具体的に知ることができた。個々の大学での動きと日本の学術が後退・学問の自由が侵害されている動きがリンクしていることが明瞭に示されていた。組合（こそ）が、それを跳ね返す拠点になりうる場であると感じた。

では、どうするのか。「学生に周知しない、構成員として広く連帯していないのは、大学当局だけではなく、（組合を含む）有志教員側も同じではないか」との当日の学生の発言は重い。今後の具体的な運動提起に期待したい。県労連（新潟県労働組合総連合）もその際には馳せ参じる。

新聞記者（長野県）

すべてを拝見できなかったのですが、以下の点で非常に意義のある集会だったと思います。

- ① 複数学部の先生が声を上げ、匿名でしか声を上げられない先生／学生にも光を当てていたこと
- ② 組合を母体にしつつも運動

の輪を広げ、教授会の力を感じさせたこと。

- ③ 文書保存の在り方を問い、後世での検証の必要性を訴えたこと。
- ④ そして、市民にも会を開き、大学の知や存在が教授や学生だけのものではなく地域に必要だと示したこと。

本当なら会場にお伺いしたかった次第です。

ご存じかもしれませんが、信州大は防衛装備庁の制度応募を決めました。学内は声を上げづらい状況にありました。学長任期もあと2年ですが、前回の学長選では意向投票3位の方が学長に就任しました。信州大の自治が心許ない状況です。

これは私たちマスコミの責任でもありますし、市民社会も応答せねばと思います。この現状を頭に置いて、新潟大の集会を拝見し、非常に感激しました。可能な限り応援したいと思っています。ありがとうございます。

編集後記

本集会は最後に決議を採択しています。その後、記者会見、教育学部教授会の決議（再質問）、人文学部教授会の決議が採択されています。これらの内容については次号に掲載する予定です。

（編集担当：岡野 勉）